

十年後の岩手

関谷 瑞希

「あなたの国の自慢は何ですか」

そんな質問をもしされたとしたら、あなたはどんなことを考えるだろうか。もちろん頭の中にはたくさんのが浮かんでくると思う。私もそうだ。技術が発達していること、風情があること、食べ物が美味しいこと。他にも多くの日本の良いところがあると思う。では岩手県は、そのどの良い部分を担っているのだろうか。

岩手県で私は生まれ、ずっとここで育ってきた。しかし、改めて故郷を見つめたとき、本当の岩手県の特徴は何であるかと、疑問を持った。特産品でもなく、美しい風景でもない。他に大きな特徴があるような気がするのだ。そして私は、テレビ番組を思い出した。それは県の特徴をランキングにして紹介するという番組だった。いつ岩手県が登場するのかとドキドキしながら画面とにらめっこをしていたのを覚えている。ついに岩手県が紹介された。それは「一番優しい県」という部類だった。行われた検証は駅でりんごを転がしてしまっただけというもので、通りすがりの人たちは、見知らぬ人にもかかわらず一生懸命にりんごを拾っていた。それだけでもすごいのにりんごの心配をしてくれる人もいた。「一番優しい県」その言葉は当時の私にとってとても誇らしいものであり、故郷に対する愛情を深めるきっかけにもなった。そして現在。はっきりと分かることは、岩手県は温もりに溢れている県だということだ。

それを感じるきっかけになったことが他にもある。私の住んでいる大槌町はきれいな海で有名だ。しかしそれには、たくさんの人々の努力があることを忘れてはいけないのだ。毎年海開きのシーズンになると町の人々が朝五時から海岸掃除を行う。その後には祈禱式が開かれ、海水浴に来てくれた人たちの安全を願うのだ。それに海を美しく保とうという町民の強い意志と一人でも多くの人に海を楽しんでほしいという真心が込められている。そんな心に海は答えようとしているのか、毎年変わらない美しさで私たちを迎えてくれる。こんな風に人の温もりがあってこそ、故郷は美しく輝くのだということを感じてきた。

そしてそれは特産品にも言える。気持ちを込めて丹念に作られたものは化学技術にも負けない素晴らしさがあると思う。

私たちが育ってきた町はわかめの養殖が盛んだ。それを伝えるための活動も多く行っている。私が在籍していた中学では、一からわかめの生体を学び、自らもわかめの養殖をするという「水産教室」が行われていた。寒い中、わかめを収穫し、全校生徒でわかめの芯さきをする。そして三年生が修学旅行の際、東京で販売を行った。自分たちが心を込めて作ったわかめを受け入れてもらえるか皆緊張だった。しかしそれ以上に、わかめを買ってもらえた時の喜びは大きい。自分たちの真心と町民の温もりを受け取ってもらえた気がするからだ。何よりも、毎年買いに来ているというお客さんに会えた時は本当に嬉しい。精一杯頑張った良かったと思う。

人の温もりによって守られる海。そしてそこから収穫された特産品によってまた新たな温もりの輪が繋がれていく。これからも岩手はどんどん変わっていくと思う。しかし、人の心に温もりがある限り、大切なことは失くされずにいられると思う。輝く未来を今度は私たちが創っていきたい。十年後も心の故郷であってほしいと願っている、皆が笑顔でいられる、そんな岩手で。